

令和元年度 奈良市立伏見こども園 研究実践概要

園長名 和田 江利子
全園児数 150名

1. 研究主題 「豊かな体験を通して、主体的に活動する子どもをめざして」
—子どもが自ら考え、遊び込むための環境構成の工夫—

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

初年度は、主体的に活動する子どもを育成するために、各年齢、各時期に応じた保育者の援助に視点をあて、遊びの時間を保障する大切さ、発達の姿に応じた言葉がけの必要性について明らかにした。そこで今年度は、子どもが自ら考え、遊び込むようになるために、どのような環境構成の工夫が必要であるのか、また、子どもの発達の姿に即した環境構成の工夫をするために、どのようなことが必要であるのかを探ることとした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもの心が動かされるような豊かな体験をし、子どもが自ら考え、遊び込むことができるような環境構成の工夫について探り、自ら遊びを創りだす主体的な子どもを育てる。

②研究の重点

- ・子どもが主体的に「やってみたい」「こんなふうになりたい」と考え、遊び込むことができるような環境構成について考える。
- ・日々の保育実践を振り返り、子どもが、どのように身近な環境と関わり、主体的に遊ぶ姿につながるのか、各年齢ごとに分析する。

③活動の方法

- ・各年齢に応じた子どもの発達の姿について探る。
- ・子どもが環境にどのように関わっているのかを分析・考察する。(~~~~~とする)
- ・どのような保育者の意図をもって環境を構成していく必要があるのかを探る。(□□とする)
- ・幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿につながる「子どもの経験」を明確にする。(①～④)

3歳児 事例1【プニプニしてる】 3歳児(6月)

保育者の意図

水遊びが存分に楽しめるように、タライをたくさん準備し、水を張っておいた。初めは①タライに手を入れ、水の感触や冷たさ、気持ち良さなどを感じていた。ビニールプールは、子どもが水を運ぶことを想定して、あえて水を入れずタライから少し離して置くようにした。子ども達が簡単に手に取って遊べる大きさのペットボトルバケツ、ジョウロ等、大小様々な大きさのものを数多く準備したことで、①子ども達は思い思いに用具や容器を選んで「プールに水を入れよう」と、タライの水をプールに移し遊んでいた。また、水が入っていることが見えるように透明の容器を準備したことで、①プールに溜まった水を使って容器から別の容器へ移し替えて遊ぶ姿が見られた。保育者も下で流れてくる水を受けて溜めたり、掬ったりして遊ぶことで、友達同士で水を移し替えたり、受けたりして、関わりが生まれた。②③ペットボトルジョウロを重ねて水が流れる様子に興味をもち「水が流れるタワーみたい」と、何度も繰り返し遊んでいた。

水を掬ったり運んだりできる様々な用具や容器を用意し、自分なりに使い方を考えたり、選んだりして遊んでほしい。

行為自体を楽しんで繰り返し遊んでほしい。

友達がしていることにも関心をもちながら、自分のしたいことを十分にできるようにしたい。

また、様々な感触を楽しんだり、自分なりに考えて遊んだりできるようにビニール袋を用意したことで、①②袋を使って運ぶだけでなく、水の入った袋を揉んだり、板にぶつけて水がはじけ飛ぶ水の動きをおもしろいと感じて、繰り返し遊ぶ姿が見られた。②ビニール袋に入れた水の感触を楽しむ姿に、保育者が「気持ち良さそうだね」と、子どもの思いを言葉にすると、「プニプニしてる」と、うれしそうに言葉で伝える姿が見られた。

自分なりに使い方を考えたり、感触を感じたりして遊んでほしい。

<10の姿につながる経験>

- ① 思考力の芽生え
- ② 豊かな感性と表現

<考察>

- ・水に興味をもち、目についた用具を手に取り、水そのものを使って、入れたり、移し替えたり、感触や心地よさを感じたりする姿が多く見られた。そこで、子どもが簡単に扱える用具や、手に取って遊べる大きさのもの、見てわかる透明の容器などを、目につくところに十分な数を用意し、そのもの自体と関われる場、その行為自体がおもしろいと感じられる場を意識して環境を再構成したことで、ペットボトルバケツなどの興味をもった用具を選んで手に取り、溜めたり、流したり、水の動きをおもしろがったりするようになり、「やってみたい」という思いの高まりが、繰り返し遊ぶ姿につながった。
- ・水が心地よく感じられるこの時期に、存分に水に触れて遊べる環境づくりをしたいと考えた。目についた興味のあることに敏感に反応し、瞬間瞬間を楽しむ子どもの発達の姿から、水がすぐに手に取れる場所や、すぐ目につくところに置いておくようにした。また、大きなビニールプールやタライを用意することで、水をたくさん使うことができ、存分に遊ぶ姿が見られた。

3歳児 事例2【落ち葉ちょうだい】(11月)

いつも遊んでいる部屋の前にブルーシートを広げておくと、以前園庭で集めた落ち葉を集めたり広げたりして遊ぶようになった。そこで、ブルーシート以外に水遊びで使っていた大きなビニールプールや園外で集めておいた様々な種類や十分な量の落ち葉を用意しておくと、子ども達は中に入り、③繰り返し落ち葉を両手で掴み取り空へ投げ、落ち葉が落ちてくる様子を楽しんで見ている。

A児は、友達が投げた落ち葉の下に行き、②「落ち葉の雪みたい」と両手を広げ落ち葉を体全体に浴びている。B児は落ち葉の上で寝転び「泳いでるの」と遊んでいる。C・D児は、プールの中で座って「落ち葉のお風呂だよ」「熱いお湯です」と思ったことを友達に伝えている。E児は、手をパチパチ合わせて、上から落ちてくる葉っぱを掴もうとしている。落ち葉が少なくなってきた頃にホウキ草を、目につくところに用意しておくと、①A児はプールの中からこぼれた落ち葉をホウキ草で集めようとする。保育者も一緒になって遊び、子ども一人一人の思いに共感しながら「落ち葉がいっぱい集まったね」と言葉にして認めつつ、周りの友達に聞こえるように声を掛ける。落ち葉掛けを続けていた子どもも、プールの中の落ち葉が少なくなってくると、C児とD児は「そっちは落ち葉がいっぱいだ」と、友達が落ち葉を集めて山をつくっていることに気付き、「落ち葉ちょうだい」とA児が集めた落ち葉をプールに入れて繰り返し遊びはじめる。

保育者の意図

場や空間を確保することで存分に遊べる場を保障したい。

十分な量や種類の落ち葉を用意することで、素材に存分に関わってほしい。

道具を用意することで落ち葉集めを楽しむなど、別の遊び方も思いついてほしい。

したい遊びを見つけて繰り返し遊んでほしい。

<10の姿につながる経験>

- ① 思考力の芽生え
- ② 豊かな感性と表現
- ③ 自然との関わり

<考察>

- ・ブルーシートやビニールプール、ホウキ草など様々な環境を準備することで、落ち葉という一つの素材に対して、広げる、投げる、見立てる、掃く、集める、掴むなど、そのもの自体と様々な方法で関わる姿につながった。このことから、一つの行為だけにとどまらず、素材と様々な関わり方ができるような環境構成の工夫が必要であることが分かった。また、子どもが選べる環境構成を準備することで、「やってみたい」「こんなふうになりたい」と、自ら考え、遊び込む姿につながった。
- ・十分な量の素材や用具を用意することで、一人一人が十分に環境と関わって自分のしたい遊びを存分に楽しむことができた。
- ・落ち葉を集めている子どもの姿に共感し、保育者も一緒に遊ぶことで、一人一人のそれぞれの子どもがしたい遊びを楽しみながら、落ち葉を散らす、集める行為を繰り返し遊べるようになったと思われる。

4歳児 事例3【レストランごっこ】(12月)

保育者の意図

家庭でなじみのある色々な調理器具(おたま、ヘラ、トング、フライ返し、子ども用ナイフなど)や素材(ミカンやニンジンの皮、キャベツなどの野菜くず、ドングリや葉っぱなどの自然物)を使ってレストランごっこをして遊んでいる。①②③小さく切ったミカンの皮とキャベツの切れ端を混ぜ、サラダをつくったり、ニンジンの皮やキャベツを切って水に混ぜて野菜スープをつくったりして、切ったり混ぜたりしてごちそうづくりを楽しんでいた。

色々な調理器具や本物の野菜や果物の皮を使うことで、本物らしさを楽しんだりごちそうのイメージを広げたりして遊んでほしい。

保育者が新たに用意した、透明の調味料入れに入った米ぬかを見つけ、①「これなに?入れていい?」と、米ぬかをスープに入れると、水に少し色が付き、味噌のような塊ができ「おいしそうになった」「給食のスープみたい」と、米ぬかが溶けたり玉になったりする水の変化を楽しむ。「もうちょっと入れてみよう」「私はサラダに塩を入れるわ」と、友達の様子に刺激を受けて、さらに、スプーンで少量ずつ米ぬかを加え、まぶしたり混ぜたりして、①変化に興味津々。

軽量スプーンや透明容器を用意し、水と米ぬかの量を調節することで見られる変化に気付いて遊んでほしい。

米ぬかへの興味が高まったため、米ぬかを大きなタライに入れて用意した。すると、これまで水や素材に米ぬかを入れたりかけたりしていたが、逆に①ボールに入った米ぬかに少量の水を入れることを思いつき、手でこねると固まって、ハンバーグができた。その様子を見た別の友達は、丸めた泥団子を、米ぬかを入れたトレイに移すと、泥団子の表面に米ぬかがつき、衣のようになった。その様子を見て②「コロケになった」と友達に嬉しそうに伝える。料理の種類が増えたことで、さらにごちそうづくりをくり返し楽しむようになった。

自分で使い方や量を考えて、まぶしたり、こねたり、固めたり等、様々な方法で素材と関わられるようになってほしい。

<10の姿につながる経験>

- ① 思考力の芽生え
- ② 豊かな感性と表現
- ③ 自然との関わり

<考察>

- ・家庭で見たことがある馴染みのある色々な調理器具、本物の果物や野菜の皮などを用意したことで、使ってみたい、つくりたいという思いが掻き立てられ、切ったり混ぜたり盛り付けたりしながら、つくりたいごちそうを自分なりにイメージして遊ぶ姿が見られるようになった。
- ・小さな入れ物に入れていた米ぬかを大きな入れ物に入れたことで、水に米ぬかを入れていた姿から、米ぬかに水を加減して入れるという行動が生まれた。大きな容器に入れてこねたり、水と混ぜて固めてハンバーグにしたり、丸めた泥団子に衣としてまぶしてコロケにするなど、米ぬかの固さや変化を楽しんで、様々なごちそうをつくる姿につながった。

5歳児 事例4【そら組スイッチをつくろう!】(10~12月)

保育者の意図

1学期の遊びの経験から、コースをつくって遊ぶことを保育室や戸外で楽しんでいる。いつもしている遊びに木片を加えることで、新たな共通の目的が生まれればと考え、自分達で遊びを進められるように、木片や大きなベニヤ板、釘、金槌などを分類して準備し、環境を再構成した。

共通経験活動での木工の経験から、遊びでも木工を取り入れてほしい。

早速、④数名の子どもが興味をもち、大きな木の板に木片を釘で打ち付けて、コースをつくり始めた。木片の形から、ドングリがうまく転がらずに横に飛んだり、大きな木の板から落ちたりする偶然の動きがおもしろくて、「変な形でも転がるよ」「いっぱい、釘でくっつけよう!」とたくさんの木片をくっつけはじめた。さらに木片をたくさんつけたことで、ドングリが複雑な動きをして転がり、コースが予測し辛くなる。

ドングリの動きを予想したり、予想とは違う偶然性をおもしろいと感じて考えたり工夫したりすることを楽しんでほしい。

課題

このことをきっかけに、できあがったコースにドングリを転がすと、思ったところに転がらない様子を見て「ここを頑張ってほしい!」

友達と一緒に共通の目的をもって遊んでほしい。

「ここから、ここにいてほしいな」と、どう転がってほしいのかを友達に伝えはじめ、④友達と一緒に考えを出し合って、転がり方や、転がる道を考えてコースをつくることを共通の目的として遊ぶ姿が見られるようになった。保育者が「どうすれば、思った通りに転がるかな」と問いかけると、①木片を打っては転がし、打っては転がしを繰り返して、少しずつ試しながらコースを微調整しながらつくることを思いつく。

転がり方を見ながら、様々なものを使って試してほしい。

ひらめき①

ひらめき②

さらに、何度も繰り返すうちに「木(木片)が動くようにしたらいいやん!」と釘を軽く打ち、木片が自由に動き、自分たちで操作できるようにすることを考え出した。①④A 児が転がすと B 児はドングリの進路を先回りして木片を動かし、思い通りに転がるように操作し、ゴールまで転がることを楽しんでた。

課題と向き合い、新たな考えを生み出して遊ぶおもしろさを感じてほしい。

<考察>

- ・木工は、これまで経験してきた布テープやビニールテープといった簡単に接着しやすい用具とは違い、木片を釘で一度打ち付けると、簡単に取り外したり、付け替えたりしにくいというデメリットがある。また、コースにたくさん木片を打ち付けることで、コースの進路が複雑化し、どこに転がるか予測しにくくなった。しかし、この課題が、子どもたちの意欲を掻き立て、友達と一緒に課題と向き合い、工夫したり、試したりして、新たな考えを生み出すきっかけとなった。あきらめずに何度も繰り返して試すうちに、釘を打ち付ける力加減で木片を操作し、自由に動くようにして、思い通りに転がる方法を思いつく姿につながった。
- ・トイのような一定の方向に転がるものが予測できるものから、大きなベニヤ板や木工を環境に加えて場を再構成したことで、ドングリがあちこちに転がったり跳ねたりして、予測しにくい複雑な動きをするようになる。この偶然的な動きが、予想していた動きと異なることをおもしろいと感じて、くり返しコースづくりを考え、遊び込む姿につながった。

<10の姿につながる経験>

- ① 思考力の芽生え
- ② 自然との関わり
- ④ 協同性

5. 研究の成果

- 本研究では、保育実践を通して、各年齢に応じた環境構成の工夫の仕方について探ってきた。3歳児は、目についた面白そうなことに興味を示し、簡単に達成できる面白いことを繰り返して行う特性を活かして、そのもの自体と存分に关わる環境が遊び込むために有効であった。4歳児は、今年入園した2年保育児であることを考慮しながら、イメージしやすい用具や材料を使って遊べるようにし、「やってみよう」という意欲が掻き立てられるような視覚的効果が生まれる環境が有効であった。5歳児は、友達と協同して遊べるように意識しながら、成功体験だけでなく、簡単に達成できそうにないことも視野に入れた環境が、新たな発想を生み出すきっかけになることが分かった。このことについて、年齢ごとに見えてきた実践事例の環境構成のポイントを以下の表に示す。発達の年齢や時期に応じた環境構成を行う上で、保育者が意識するポイントの違いがあることを明らかにするとともに、発達の姿に応じた環境構成の重要性を理解して、実践にあたる保育者の役割の重要性についても、十分に認識して取り組んでいくことの大切さが改めて分かった。

	3歳児	4歳児	5歳児
環境のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・感觸遊びができるもの ・視覚的に、見てわかりやすいもの ・行為を繰り返す事のできる場 ・十分な数や量の扱いやすいものを用意しておく ・目に付くところに置く 	<ul style="list-style-type: none"> ・本物の用具や素材 ・本物を使った行為を楽しめるもの ・変化を楽しめる素材 ・米ぬかと水等、素材の量を調節できる道具の工夫 ・つくる過程を楽しめる環境 ・友達の様子を見て、刺激を受け合える場の構成 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で扱いきれない大きさのもの ・友達と協同して遊べる環境 ・簡単に達成できない素材や材料 ・試行錯誤できる環境 ・釘や金槌のような、決まった使い方をするものや、偶然性が生まれるような素材も用意しておく

- 自分一人ではなく、職員間で保育実践の振り返りをしてきたことで、自分以外の保育者の意見を取り入れて、環境構成を見直し、再構成することができた。年齢に応じた発達の姿や必要な経験、保育者が準備した“もの”に対して、子どもがどのような反応を見せ、関わっているのかについて重点的に話し合ったことで、子どもが主体的に「やってみよう」と考え、遊び込むことができるような環境構成の工夫について学ぶことができた。

6. 今後の課題

2年間の研究で、子どもの姿を読み取って、援助の必要性和発達に即した環境をどのように構成するのかについて探ってきた。その中で、子ども自ら考えて遊び込むためには、子ども自ら遊びを創り出すことが、遊び込むことにつながるのではないかということが見えてきた。そこで、次年度は、子どもが「やってみよう」「ひらめいた」と、自ら遊びを創り出す姿はどんな瞬間なのかについて追及していきたい。また、その姿は、年齢によってどのように異なるのかについても明らかにしていきたい。